

## 鳥インフルエンザの発生に備えた焼却処理体制の検討

和田山家畜保健衛生所

○堤 淳 岩木史之 小山遥子 浦本京也

当所では平成 19 年度に焼却処理体制の検討、平成 21 年度に焼却施設での焼却試験を実施し鳥インフルエンザ(AI)発生に備えた管内焼却体制の構築に努めてきた。平成 23 年の AI 防疫指針改定、平成 25 年 4 月の南但クリーンセンター新設を機に、以前から課題であった焼却処理期間の短縮を図るため施設の調査と焼却試験を実施したので概要を報告する。

### 【方法】

1 焼却施設の現状調査：平成 21 年調査時からの設備変更点、稼働時間延長の可否、助燃バーナーによる炉内温度調整の可否、従事者意識等の項目について聞き取り調査を行った。  
2 焼却試験：南但クリーンセンター(焼却能力 43t/日)にて、死鳥 5 羽(約 15kg)入りの 45L 医療用廃棄物密閉容器(容器)20 個分を、医療用廃棄物投入装置により 1 分間隔で 10 個投入、一般ごみ 350kg を投入後、同間隔で 10 個を追加投入した。その際の所要時間、炉内温度変化、炉内温度調節方法、投入作業上の問題点等について調査した。

### 【結果】

1 焼却施設の現状調査(9 施設)：平成 21 年調査時から 2 施設が 1 施設に統廃合、その他は設備変更点なし。2 施設は一時休止。8 時間稼働処理施設のうち稼働時間延長可能は 4/4。炉内温度管理のための助燃バーナー利用可能は 6/7。焼却作業マニュアルの引継がなく、発生時の役割の認識不足は 2/7。平成 28 年までに 6 施設が 2 施設に統廃合予定。  
2 焼却試験：容器 20 個の投入終了までに 35 分、焼却開始から完了まで約 90 分を必要とした。焼却中の炉内温度は給気量調節により 886℃~999℃で安定。焼却灰の性状に異常なし。しかし、連続投入により容器の一部破損、炉内投入口部分で容器の詰まりが認められた。

### 【まとめ】

①円滑な処理実施のため焼却作業マニュアルの確実な引継を担当者に依頼した。②容器の破損と連続投入による詰まりはブリッジブレイカーと人力により解消した。③混合率は 30%まで引き上げ可能であり、稼働時間の延長により管内焼却施設の 1 日の鶏体焼却処理量は平成 21 年度試算の 89.6t から 136.7t への増加が見込まれ、併せて助燃バーナーの利用により混合率を引き上げることで、焼却処理期間はさらに短縮可能と考えられた。

以上のことから、焼却処理期間の短縮が図れるが、万が一管内の最大規模農場で AI が発生した場合、管内焼却施設のみでの対応では鶏体焼却処理に約 6 日間必要と算出され、さらなる短縮が求められる。ゴミ収集量は減少傾向であり、将来的に管内焼却施設が減少し短期間での焼却がより難しくなると推察されることから、今後は移動式焼却炉の利用を検討し、県内市町の連携による焼却施設の相互利用体制を構築する必要がある。